



羅針盤

名嘉眞 武國

Takekuni Nakama

久留米大学医学部皮膚科 主任教授



再発抑制・寛解維持に悩む疾患について

私が診療している福岡県の筑後平野に囲まれた久留米市という、決して都会ではない土地で新患の患者さんを診察していると、こちらの方言で「いっちょん、治らん」という方がいらっしゃいます。これはご自分の皮膚疾患を前医で治療していたが「まったく治らない」ということですが、このようなケースの多くは一度は軽快もしくは寛解したが再燃・再発してきた症例であることに気づかされます。これを患者さんが「治らん」と表現しているわけです。しかし詳細に病歴をお聞きすると、患者さんご自身で治癒と判断し、ご自身の判断でその後いきなり診療を途絶えさせたことが主な要因であることも判明します。この件に関しては患者さんと医師とのコミュニケーション不足なのかもしれません。

今回のテーマは「再発抑制・寛解維持に悩む疾患」で、寛解後いかに診療を途絶えさせず良好な状態を維持させ、再発を抑制するかという、炎症性疾患であれ悪性腫瘍であっても悩ましいテーマです。

これまでの数々の疾患に対するガイドラインでは、通常治療の到達目標までは解説していますが、再発抑制と寛解維持についてのエビデンスの高い報告はごくわずかで、詳細な解説もされていないのが現状です。そのため今回のテーマに対して原稿を作成するにあたり、診断や病態、治療といったようなテーマとはかけ離れていることから、執筆をご依頼した先生方にとっては実に「依頼原稿の作成に悩まされる稀なテーマ」ともなったのではないのでしょうか？今回、責任編集者の立場となりました私自身も限られた紙面のなかにおいて、今回のテーマ

に対して具体的にどのような疾患を選択すべきか、またどのような執筆項目を検討していただくべきか悩んでしまい、少々時間を費やしてしまいました。

ところが実際に各先生方の原稿を拝読しますと、とても興味深い内容になっていることから次々と読了してしまい、時間を忘れてしまうほどでした。その内容から基礎および臨床研究に長けた各先生方が、日々の診療においても患者さんとの良好なコミュニケーションからアドヒアランスも含め、再発抑制と寛解維持にそれぞれ独自に工夫されていることが伝わってきました。また同時に、先生方の患者さんに対するお優しい人間味溢れるお姿も窺えます。いまだコロナ禍でもあり日々のストレスとお忙しいお時間をお過ごしの中、悩ましいテーマに対して今回の依頼にお時間を割き執筆していただいた先生方には大変感謝いたします。

読者の先生方、今回のテーマの目的から本誌のVisual (Dermatology) に即した鮮明な臨床写真は少なくなりましたが、とても興味深い内容となっています。是非すべての原稿をお読み頂き、日々の診療にお役立ていただければと切に願っております。

私も今後に大いに参考にさせていただき、多くの患者さんから「先生、がば調子よかばい(とても調子がいいです)」と言っていただけるような診療ができるよう、心がけていきたいと思います。

最後ですが、今回とても新鮮で興味深いテーマにおいて私を責任編集者として御指名いただいたことは大変光栄であり、編集委員の先生方には心より深謝いたします。